

分割されざる「個人」幻想への挑戦 —岩明均『寄生獣』の皮膚感覚—

稲賀繁美

民族浄化は、1989年のベルリンの壁崩壊に続くポストコロニアルな世界状況下で、我々を呪縛する強迫観念となってきた。かつて支配的だった、西欧自由社会と東欧社会主義との二分法は80年代には退潮し、代わってこれに劣らず図式的で虚構じみた別の対立、すなわち「聖なるイスラーム」によるテロリズムと、世俗化されたアメリカの「悪の帝国」との対立に置き換えられた。サミュエル・P・ハンチントンの唱えた、西欧文明とイスラーム・儒教文明コネクションとの衝突の危機が近い将来起こり得る、との仮説は、ワシントンの政治決定者たちに無視でさない影響力を及ぼしている。そのかん、民族の純粋性を、純粋性のために追求する傾向が、多民族性の軋の外でヘゲモニーを確立しようとする、多くの政治指導者の日程表に昇り始めた（なお、お断りすれば、本論文の執筆は旧ユーゴ内戦期の1997年前半である）。

岩明均の『寄生獣』（講談社）は1995年に完成したが、これは日本の現代社会がかかえる隠され

たクセノフオビアに関して、深い洞察を示すマンガ作品であり、また広範な文芸批評家や社会学者から高く評価された。日本の知識人がなおコミックを学術的には軽視する傾向が強いなかで、鶴見俊輔はかれの73年の人生のなかでこれほど彼を捕らえた本は、ほかに一冊しかなかった、と告白した（それよりはるかに若い世代で、大澤真幸も発言している）。いったいどうしてこの作品は、かくも熱狂をもつて迎えられたのか。虚構の寄生動物は、どうして今日の倫理的な問題の虚を突くうえで、有効なものだったのか。この作品が、コミック特有の映像に頼って強調した皮膚感覚に注目しながら、以下こうした疑問に答えてゆきたい。

1

ある夜、テニス・ボールほどの大きさの未知の地球外生物が突然地球に幾つとなく落下し始める。孵化した卵からは、頭にドリルのついた蛇のような虫が現われる。その本能に導かれるまま、それらは近くで眠ってい

る人間の頭のなかへと潜り込む。それらのほとんどは、うまい具合に宿主の脳を乗っ取って、それを朝までに内部から食べ尽くしてしまい、それらの体が、宿主の頭部そのものに置き換わってしまう。並外れた柔軟性に溢れた体のおかげで、それらは宿主の顔の特徴をたくみに模倣する。こうして宿主に変装することで、それらは表向き宿主のアイデンティティを維持しているように振る舞う。しかし元来の脳はもはやどこにも残ってはおらず、いうまでもなく、宿主その人のアイデンティティなど、もはや失われて取り返しがつかない。宿主の体はいまやそれに乗っ取ったよそ者の占拠者の支配下に入っている。

次の朝から、あちらこちらで凄惨な人殺し事件が発生し始める。寄生獣たちが、自分の身近にいる人間たちを、食料として摂取し始めたからだ。妻や子供が突然、自分の夫であり父だと思っていた存在から攻撃されてしまう。まだ人類は、明確にはこの侵略の事実を察知していなかったが、何千というまがい物の人類が突如地上に出現していた。マス・メディアでは恐るべきミンチ・殺人事件が報道され始める。

さて、ここに、そもそもの侵略プログラムの達成を阻む、ある事件が発生する。一匹の虫は、ある少年の頭部へ侵入しようとしたところ、少年はなにかむず痒いの

に気づいて目覚め、自分の顔めがけて飛びかかってきた虫を右手でくいと止める。そのため虫はその目的地に到達しそこない、頭脳を奪うかわりに、少年の右腕のなかに侵入することで自足することを余儀なくされる。朝までには、虫は宿主の少年の右腕に置き換わってしまふ。だがこれは寄生生物にとっては「失敗作」であった。というのも、この宇宙生物は少年の頭脳を誘拐し損なったからだ。もちろん宿主の少年は、自分の腕を「食べちゃった」と語る寄生獣にたいして怒りをあらわにし、この、もはや彼には属さない自分（？）の右腕を殺そうとする。だがうまくはゆかない。右腕の皮膚は、今やおそろしく柔軟性に富み、自由自在に変形できるので、怪物は難無く少年が攻撃のために用いたナイフを掴んで、わけなく、へし折ってしまう。

少年のこの自分の（？）右手にたいする混乱した反応は、現代の外科医療行為で、疑問に付されることのないままに、ある深い曖昧さを明るみにだす。一方で、この寄生生物に、悪性新生物の比喩を見ることは容易だろう。現代の外科手術は、こうした異常増殖する悪性腫瘍を切除することによって成り立っている。ところが、大規模な切断は、ハンディキャップを招き、患者のライフ・スタンダードを著しく悪化させうる。他方、この寄生生物は、移植された人工器具とも解釈で



fig. 1

岩明均『寄生獣』第10巻扉、講談社、1995

©岩明均 講談社アフタヌーンKC

初出：「和訳」国際シンポジウム「The Faces of Skin: 皮膚の想像力」報告書（国立西洋美術館刊、2000年）「英語原文・本誌P140-132に掲載」
「The Imagination of the Body and the History of Bodily Experience」報告書（1997年2月2000年）

きる。患者の生命維持や、社会生活維持に必要な場合には――例えば手術で損なわれた顔形を維持するための皮膚の――移植が推奨される。日本ではつい最近（1995年）、脳死をもって個人の死と認める、新たなガイドラインが導入され、こうした臓器移植を推進することとなった。皮膚の表面は自分だが、その下には他人の臓器が活動している、という異様な風景が、医学の名のもとに容認される法律環境が整えられた、といってよい。だがここには、切除と移植という、よく考えれば同居不可能なはずの矛盾した欲望が共存している。寄生獣を、取り除くべき癌であると同時に、移植されたプロステシスとして描くことで、岩明のストーリーは、その拔群の映像的な効果もあいつて、医療倫理が患者の皮膚の下に隠そうとしていたこの曖昧な薄気味悪さを暴き、外科的に扱われる臓器の所有権への疑問を投げかけた、といえる。

2

実際この物語にあつては、もはやどちらがドナーでどちらがレシピエントなのか、判然とは分らない。少年にとつてみれば、彼の右手・右腕は寄生生物だが、それを取り去ることはできないのだし、寄生生物にとつても、少年の頭脳は余分なのだが、自分は、宿主の少

の熱狂的な説書の後始末をさせられて文句を言う（vol.1, p.45）：なお、日本のコミックではコマは上から下へ、右から左へと流れてゆくのが原則だ。

こうした場面の細部に、作者、岩明は、思いがけないほどの描写の才能を発揮する。例えば少年がそのガールフレンドに会うと、その右腕は突如驚張した巨大なファロスに変形する。寄生している右手は、少年のホルモン分泌に忠実に、というか気まぐれに反応したものらしい。ここで寄生獣は、海綿体の詰まった伸縮自在の皮膚からなる男性生殖器官の、いわば誇張された提喻の役割を演じている。実際、寄生獣は人類の性的本能に興味があるのと同時に、宿主があまりにその潜在的配偶者にたいしておずおずとした態度を取るのにいらいらする。「人間の交尾が見られなかったのは残念だった。したいことをしないのは体に毒だぜ」などと、右腕はその持ち主（？）に忠告する（vol.1, p.53や58）。そればかりか、右腕は、場所もあるうか公衆便所で、自分の宿主の生殖器を勃起させようと試みる。「あ、チョ、なにするんだ、よせ」と少年。水道の水をかけられた右腕は「冷たい」などと、やりあう。この対話、第三者から見れば、どう見ても気が触れた独り言で、少年の学友たちはびくびくして気味悪がる。少年にとつて恥ずべきことにも、自分の意思に反して強制された

年の頭脳に支配された人間の身体に寄生しているのだ。両者にとつて、おたがいに不都合このうえない状況だが、しかし両者は少しずつ両者が相互に依存していることを納得してゆく。自分の宿主がいかに自分にたいして敵対的であるとはいえ、寄生した身分としてはこの宿主なしには、自分の生活がままならない。宿主にとつても事は同様で、いかに自分の右腕がしばしば言うことを聞かないであろうとも、だからといって右腕を失ってしまったのは、これに劣らず不利な状態を招いてしまう。とはいえ、お互いの協力が必要だ、と頭で理解すること、実際にその協力がうまく行くかどうかは、別問題。このトラブルを悲喜劇的に描く場面で、変形自在な皮膚という形象が、文字ならぬ映像ならではの喚起力を伴って活性化される。

ふたつの異なったアイデンティティーが同一のひとの人体に共存しているのだから、少年と怪物とのあいだでは、滑稽にして深刻な口論や諍いが、次々と発生する。右手を占拠する怪物は人間社会の仕組み百般を早くマスターしようと、読書に余念なく、またたくまに必要な知識と言葉のスキルを身につけてゆく。好奇心のかたまりのようなこの右手は、百科事典を読破し、その可塑性体を活かして、挿絵にあつたチキンの解剖学的組成まで模倣してみたりする。少年は、自分の右手

射撃ですら、公衆の面前で臆面もなく自慰に及んだもの、と勘違いされかねない（vol.1, p.54）。

そうこうするうちに、少年は右手にある種の親近感を持つにいたり、右手も自分のことをミギーと呼ばれることに同意する（ミギーはいうまでもなく右を意味する。ちなみに、タマゴツチなる玩具が流行していたのも、本書刊行の頃だったはず）。ミギーもまた少年のベツト扱いされることは拒絶しながらも、自分の意思で睡眠するあいだだけは、自分自身たる「右腕」のコマンド権を、少年に返還することに同意する。「疲れたので眠る。『君の右手を』大事に使えよ」などと宣言して、ミギーは眠ってしまうのだ（vol.1, p.47, 55-56）。試行錯誤のうちに、ミギーは自分の無配慮な行動で少年を無意味なトラブルに巻き込まないよう、学習してゆく。むやみな疑いを招かぬためには、ミギーは奇妙な行動を慎まなくてはならない。公衆の面前で、自分のからだや皮膚を、人間の解剖学的な限界以上に変形させてしまうことなど、問題外だ。一心同体のふたりの安全のために、ミギーだけでなく少年もミギーの存在を、少年の家族からも隠しておさなければならぬ。だが同時に、この奇妙な同居を続けるうちに、少年は超人的な右腕の能力をもった自己、という自己認識をも形成してゆくことになる。

ここにみられるふたつのアイデンティティーの同居形態の発想源としては、もちろん、シャム双生児が思いうかぶ。このような奇形「tweek」を話題として、一身にふたつの意思が同居した場合の葛藤を描く空想は、古くからある。日本でも江戸・徳川時代ならば、山東京伝の『一鉢分身扮銀煙管』が、男女のシャム双生児の愛憎をコミックに描いているし(註2)、萩尾望都の『半神』(1985年)は、美醜を分かちもつシャム双生児の姉妹が、分離されることで美醜の役割を転じて、かつて美であった片割れが醜へと変貌しながら死んでゆく。この作品は、野田秀樹と夢の遊眠社によって舞台にも乗せられた(1986年)(註3)。さらに萩尾の『イグアナの娘』(小学館、1994年)は、その発展形として、姉妹の役割分担を、母子の愛憎に重ね合わせ、イグアナと人間との転生の物語として描いて行く。また「沼のほとりのバドルビー」の獣医、ジョン・ドリトル先生に従う、世界に「頭しかない」ブシユミューは、日本では井伏鱒二によって「オシツオサレツ」と命名され、思慮深い双頭の動物として謙虚な活動を見せる。最近になって、より「進化」した「このうのも」これは両方の頭で同時に言葉を発するからだ。オシツオサレツの生存が、堀江俊幸によって確認された

ト氏、あるいはエドガー・アラン・ポーの楕円形の肖像のように、「一人の人格の裏表をなす、というのではなく、また萩尾望都のような、母娘、姉妹の美醜の対比というコンプレックスを演出するマトリックスとなる」でもなくて、ここでは分割不可能な個体になたつての独立したアイデンティティーが住まう。このふたつの異なったアイデンティティーは、しかし相互に依存的であつて、社会的にはあたかも分割不可能な個人であるかのように振る舞う(あるいは振る舞おうと、努力する)。公衆「パブリック」の前では、同一の皮膚のしたで、両者はあくまで一枚岩であるように見えねばならない。だが両者のプライヴェートな個(soul)は、ふたつに分かたれている。まさに「引き裂かれた個(Divided Self)」(RD Laing「ライン」)だ。こうしてアイデンティティーというものの自明性は振れてしまい、恒常的な葛藤の対象となる。

この葛藤を観察していると、こう哲学的な、あるいは精神医学的な問いを問わざるをえない。個人「非分割」と呼ばれる「我」なるものとは、いったい何なのか。と。個の一体性といわれるものは、果たして信じられているほどに自明なものなのか。と。さらに、分裂した人格と呼ばれるものは、ほんとうに患者にとって克服すべき、精神病的な外傷の結果に過ぎないのだろうか。と。

(『図書新聞』1999年3月20日号)。佐々木マキ「リンクの象を知らないか」(絵本館、1998年)を参照されたい。ついでに言えば、双頭の鷲を紋章に戴いたオーストリア「ハンガリー」二重帝国の崩壊が、民族共存の破壊と裏腹だったのも、図像学的な寓意の象徴的な意味を探るうえでは、意味深長といつてよい。

だがこうした先行例と、この岩明の物語が決定的に異なるのは、主人公たるこの寄生物と人類とのキメラが、あたかもその複数性を隠蔽することによって個体であるかのように振る舞うべき運命を授かっていることだ。フランス語には *être dans la peau de qn* という表現があるが、まさに他者の皮膚の中に入り込むことで、その他者を演じることが、ミギーにとつての「右腕」としての倒錯したアイデンティティーとなる。また、この一心同体、複数によって個体をなすという主人公の特性が「かれを」と呼ぶべきか、かれらを、と複数を用いるべきか、文法的にも困難を感じるほかないのだが、「エイリアン」シリーズ「初期」を含む、多くのハリウッド・モンスターものの怪奇映画や空想物語からの本作品を画然と区別する。この意図的な非決定性に関して、ここで三点の指摘が必要だろう。

まず、いわゆるドッペルゲンガー状況は、ここで新たな意味を担う。オスカー・ワイルドのジキル博士とハイ

ちなみに、19世紀末のヒステリーが今日では消滅したのにも似て、分裂症という病名は、おそらく近い将来、医療の世界から消滅するだろう、との予測もある。

次に、ここで、時に目玉に化すバートナーと同居する少年という形象が、作者自身、少年の口を借りてふと漏らすように(vol.3, p.57)、水木しげるの『ゲゲゲの鬼太郎』から着想を得ていることを指摘しておくのは、無駄ではあるまい。『寄生獣』での、主人公の少年とミギーの関係は、『ゲゲゲの鬼太郎』の主人公の少年とミギーの関係は、鬼太郎少年と、その左目の眼窩に居候して、時々そこから出てくる、鬼太郎の父と信じられている目玉人間との関係を、なぞっている。発生学的に言えば、目という器官は、皮膚が体内に取り込まれることで形成される。だが、鬼太郎の父は、まさにこの発生学的過程を逆転したように、息子の眼窩から、ぼろりと出現する。また目がしばしば超自我を司ることも、言うまでもない。ところが鬼太郎におけるこの父と子の依存関係は、個人の統合性と信じられている象徴的階層関係を裏切り、さらに、息子による父殺しという、オイディプス・コンプレックスを逆手にとつたような倒錯した構造によって、支えられている。はたしてこの逆転「そしてここでの「母」の欠如」は、倫理的、道徳的な水準で、何を意味するのだろうか。



fig. 2

山東京伝『一鉢分身扮銀煙管』原



fig. 3

劇団夢の遊眠社 第32回公演「半神」(1986年12月)

写真提供: NODA・MAP

第三に、この物語は、恐怖科学空想ものという物語の枠組みを借りながら、西欧においてほとんど自明視されてきた衛生思想の浄化への偏執に、根底的な疑問を突き付けている。すなわち寄生という現象は（映画では「エイリアン」初期や、「ターミネーター」シリーズなどに現われる侵入者のように）、もっぱら除去されるべき異物、排斥されるべき敵、絶対の悪、としては表象されていない。岩明の物語では、寄生物はもはや主人公の個への脅威とは見なされず、むしろ個というものの自己認識や自己形成、人格完成に貢献するもの、として描かれる。興味深いことに、これは衛生学や免疫学における、寄生現象への最近の発見や仮説とも軌を一にした事象というべきだが、その前に確かめておきたいことが若干ある。

4

ここまでで、我々は十巻からなる物語のようやく第一巻の終わりに近づいたにすぎない。ここで物語全体の骨格を必要最低限、三点にわたって指摘しておこう。まず、寄生獣がやっかいな理由といえば、それは主にこれらが新鮮な人間の肉を栄養とすることだ（同様の人肉食宇宙人が、肉屋や屠殺場の倉庫に人体をずらりと吊るす場面は、北米SFにもよくある設定だ）。たしか

に初期のような衝撃的なミンチ人肉食事件は徐々に報道されなくなる。だが、その代わりに、理由不明の「蒸発」や理不尽な行方不明のケースが報告されるようになる。寄生獣たちは、自分たちの食料確保が発覚しないように、より安全で賢い方法を学んでいたわけだ。だが、この表向きの「社会化」の裏では、人間捕獲が、より隠微なたちであいかわらず遂行されていた。

第二に寄生獣が人間界に拡がるにつれ、目撃者がいやおうなく出現する。人間の肉体を捕食するためには、寄生獣たちは、その時だけは人間の皮膚を装った頭部の変装を止めて、それを猛獣じみた牙つきの大口に変形して、人肉を漁らなければならない。この変身を人間たちの目から完全に隠しきるのは不可能だった。ついに或る寄生獣の個体が、自分の本性を隠しおすのに失敗し、不注意にも目撃者の少女を殺害しようとする。

ところが様子のおかしいことを悟っていた少女は、高校の化学実験室で、怪物と化した化け物（！）に硝酸の入った瓶を投げ付ける。うっかり硝酸を飲み込んだ怪物はその頭脳―それはその皮膚全体に散在している―のコントロールを失い、なかば正気を失ったまま校舎のなかをさ迷って、無意味な大量殺人を犯してしまう。この殺戮をくい止めるために、主人公の少年はミギー＝右腕の助けを借り、ふたりは協力して大きな石を、こ

の気の逸った怪物の左胸にたたき込む。ミギーの怪力のおかげで、石は怪物の宿主の胸を貫通し、巨大な穴を空ける。怪物を殺害する最も有効な手段は、その寄生している人間宿主の心臓を破壊してしまうことだったわけだ。しかしこの出来事のために、怪物の死体はついに人間に捕獲されてしまい、怪物の實在に動かぬ証拠を提供してしまう。怪物の認知に、皮膚の与える感触がいかに決定的かも、作者の巧みなデッサンが示すとおりだ。とまれ、この事件を切っ掛けにして、この未確認にして危険きわまりない生物の秘密を解き明かすべく、密かに大規模な捜査網が敷かれることになる。

第三に、こうして少年とミギーとの立場が、事件の鍵を握ることになる。少年とその右腕が、事件の真実を知る唯一の存在だからだ。一方で少年（およびそれに寄生したミギー）の存在は、そのほかの寄生獣たちから、自分たちの生き残りにとってははなだ危険なもの、と見なされるに至る。かれらの秘密を少年が暴くだけで、寄生獣たち全体の生存が危機に瀕することとなりかねないからだ。自分たちの安全確保のために「正常」（？）な寄生獣たちはこの、いわば突然変異な個体（？）を始末しよう、との決定を下すに至る。だが他方で、人間側の警察にとってみても、少年は掛け替えのない重要参考人となる。こうして仲介者にはつきものの

の運命が主人公（たち）に到来することになる。かれ（ら）は利害にかかわる両側の当事者から危険分子としてチェックされる。あたかもインソップ物語の蝙蝠が動物の世界と鳥類の世界の双方から敵視されたのと同様、この「突然変異」の個体―なかば寄生獣にしてなかば人間という「ふたなり」―は、敵対する両方の陣営のあいだにあって、特権的だがリスクも大きな媒介役を演じる役回りだ（bisexualityに対する社会差別という現象と比較すべし）。こうして物語が進行するにつけ、少年の周囲の緊張感はいやましに高まってゆく。

5

だが、皮膚論を所望されているこの場で、この行き詰まるストーリーの顛末を聴衆に語り、その読書の楽しみを奪うのは、野暮というものだろう。その代わりに、以下、岩明均が物語の細部に仕込んでいたと思われるメッセージを、我々の論点である皮膚論にそって、いくつか検討してみたい。人間の皮膚を装う寄生生物という存在について、さらに掘り下げてみよう。とりわけ寄生獣と人類との関係に関して、三点ほど指摘が必要だろう。

第一に、人類「ヒト」を捕食する習性。或る寄生獣は、自分が「人間を殺せ」という命令を受け取ったの

は、自分が宿主となった人間の頭脳を侵略した瞬間だった、と回想する。その一方でミギーは、「この種」「人間」を食い殺せ」という感情、そんな「すさまじい怒り」は、人間の「脳を奪わなかった自分には存在しない」と告白する (vol.10, p.129)。読者もこのかん、ミギーは人間の肉体を食べたいなどという、いかなる空腹も必要も感じていないことを知らされている。宿主の少年がちゃんと食事をしているかぎり、ミギーは自分で捕食などする必要はなかったのだ (vol.1, p.148)。つまり、人間の脳・頭部を奪取した寄生獣にだけ、種としての人類を抹殺せよ、という命令―あるいは本能―が宿ったことになる。

これ以上説明するところとなるためか、著者は直接には何も語っていない。だが言外には、こう漏らしていることになる。つまり殺害の本能は寄生獣に遺伝的には刷り込まれてはおらず、それはあくまで寄生獣たちが漁った人間の脳髓から伝達されたのだ、と。とすれば寄生獣たちは、殺戮という自分たちには未知の本能を、いまや自分たちが捕食する資格を得た当の相手から植え付けてもらうがために、人間の脳髓に侵入するべくプログラムされていたことになる (もともと第一巻では、誤って犬の頭部に寄生した個体が、犬を襲うという場面が描かれているのだが、これは犬にも同種殺戮

は、もうひとつの「宿主が」「男性」の個体と性交の実験をして、人類の子供を生むと試みる (vol.1, p.183)。だが当初は純然たる科学的実験だったはずのこの試みは、この「女性」寄生獣に、微妙な心理的影響を与えはじめる。いわば、「肌を許す」行為が、寄生獣に人間の肌合いを植え付けたわけだ。

作者は、この女性寄生獣にとある女子大での講義を聴講させる (vol.6, p.119, 125)。その教室では老教授が、ドーキンスの利己遺伝子にかんする仮説を解説しているのだが、思えば遺伝子操作には介入できない寄生獣は、その限りでは、種としての人類にとって敵対する存在とは言えないだろう。それどころかドーキンス流の枠組みに立って考えてみれば、人類の遺伝子は、通常、配偶体としての人体に寄生しているのみならず、脳髓を乗っ取った寄生獣すらも、自らの寄生媒体として利用している、と見ることも可能なわけだ。

第三に、両者の共生が進行するにつれ、少年とミギーも、お互いにその気質に変化を期する。物語第二巻では、少年の心臓が、少年の母親に変装した寄生獣の攻撃によって破壊される。宿主の生命を助けるために、ミギーは自分の身体を分割し、自分の体の一部を材料にして、損傷した宿主の少年の心臓を修繕する。この操作＝手術によって少年は命を取り留めるが、同時に

の本能がある、とすれば、矛盾はすまい)。つまり、人殺しが「肌に合う」ようになるためには、まず人殺しを犯す必要があった、という訳だ。もちろん、殺害を目的として同種を殺害する生物は、人類「ヒト」に限られるわけではなく、高等霊長類には広くそうした事例が知られている。とはいえ、狩猟の開始とともに類人猿は人類となった、とする狩猟仮説も、自然人類学では知られている (マット・カートミル、内田亮子訳『人はなぜ殺すか』新曜社)。そうした訳で、寄生獣という虚構は、殺害を自己目的としうる種としての人類、という事実を浮き彫りにするための工夫だったことになる。

第二に、寄生獣は、被造物としてはおかしなことに、生殖能力が欠如している (このあたり、原作者は連載開始当時には気づいていなかったのかも知れない)。寄生獣が宿主たる人間の頭脳を占有しているかぎり、その宿主 (女性) が宿した子供は、人類の子供でしかない。寄生獣はその寄生する人類の遺伝子情報に介入することはできないわけだ。或る寄生獣はこれを奇異に思い、自分たちの存在理由を問い直す。「わたしたちはどこから来たのか、わたしたちは何なのか、わたしたちはどこに行くのか」 (vol.1, p.28)。こうポール・ゴギャンを気取って 自問した (宿主が)「女性」の寄生獣

超人的な運動能力を獲得する。ところがこれとは裏腹に、ミギーは右腕としては30パーセントほど萎縮してしまい、あまつさえ自分の意志とは無関係に日に四時間は眠り込む、という人間同様の体質になってしまふ。加えて、これまで、貫して冷血・冷徹一点張りだったミギーの推論は、なにかしら人間的なタッチを帯びるようになってくる。右腕ミギーにも「人肌」が宿りはじめるわけだ。

こうして寄生獣たちに、人間的な「肌」のぬめりが出てくる様子は、物語のなかの対話にさりげなく、しかし巧みに織り込まれる。一例だけあげておこう。ミギー「…人間でいうところの「情」という感覚は寄生生物には育たない」。少年「…知ってるよ。ミギー」。「それなら……わたしを危険にさらすようなことはしないでほしい (……) わたしが言いたいことがわかったのかい?……自分の右手が人「少年のガールフレンド」を切り刻むところなんて見たくないだろうってことなんだが……」少年「…それ……脅かしてるわけ?」ミギー「「ウン」少年「怒って」…「ほんっつと情のかけらもない!」ミギー「…だつてそうだってば」。このミギーの最後の台詞 (だつてそうだってば) はその意味しているところ「内容」を「表現」が裏切っている。自分は情というものに欠けている、と告白することそのもの

が、ミギーの少年にたいする情を、さらにはありとある被造物にたいするミギーの情の証しとなっているからだ (vol.5, p.86-87)。こうした肌触り、はたしてドイツ語への翻訳でうまく伝わるだろうか？

6

さて、寄生獣たちが人類との共生を模索しているあいだにも、公安警察や自衛隊の特殊部隊は、これら寄生獣を絶滅すべく、組織的な工作を仕掛けてくる。某市役所が寄生獣たちの大本営と突き止めた特殊部隊は、これを包囲するに至る。麻薬中毒患者が銃をもって立てこもったとの口実のもと、市庁舎を包囲した特殊部隊は、特設したX線透視装置で割り出した寄生獣を、その場でひとつひとつ処刑してゆく、という強硬手段にでる。人類であれば頭蓋骨が写るはずのところで、寄生獣ならば頭部が影になる。肌の下に隠された内実が、X線によって見破られる、というわけだ。殺害の方法は、石を心臓にぶち込むことの応用で、1Bショットガンの弾丸を胸部に打ち込んで、瞬時に宿主の心臓を破壊する、という方式。X線装置が、肌の下に隠された謎を透視してはじめて事の真実が明らかにになる。X線こそが、西欧近代の解剖学的方法論と、皮膚＝表層にたいする不信を代弁する比喩となっているが、そ

物語から我々が引き出すことのできる、なおふたつの別の教訓に注目しておきたい。それらはいずれもどうしたわけか、寄生獣によってなされた犠牲的行為、というかたちで、物語られる要素となる。

最初に、例の妊娠―分娩実験をした「女性」の寄生獣。人類の赤ん坊を生んだ「彼女」は、徐々に人間の「情」を理解するようになる。主人公の少年の安否を気遣うガールフレンドを前にして、この寄生獣は、こうため息をつく。「彼のことが心配なのね。うらやましい……」と。敢えて散文的に言い直せば、こういうことだろう。「あなたの愛情ある気遣いが自分にもあったら、と望むのは、嫉妬というものだろうか」(vol.8, p.17)。この先述から「彼女」は警察官の集中砲火を甘んじて受けて死ぬことになるが、その際、「彼女」はなぜか母性本能を発揮してしまい、「自分」の赤ん坊を救うために、自分の身体を犠牲にする。胸に抱いた赤子を銃弾から守るために、彼女は自分の髪―これも寄生獣の皮膚の一部だが―を変形させて、その覆いのなかに赤子を包んでしまう (fig.4)。この場面で作者が、キリスト教の図像にある、慈悲のマリヤ (Maria misericordia) を応用していることは、あまりに明白だろう (fig.5-12)。ここで寄生獣の皮膚は、聖母が信徒たちを保護するマントへと変貌して、人類の赤子を匿うに至る。こ

うした解剖学的走査への信頼の態度を、作者はひそかに批判の対象としている。そのことは、この作戦が破れて、結局市庁舎を包囲した特殊部隊の隊員が、全員皆殺しにされてしまう、という顛末からも明らかだろう。

寄生獣の頭目と目された市長は、死に臨んで最後の演説を行なう。そこには、作者がもつとも分かりやすい水準で伝達したかった（あるいは陳腐なものとして暗に批判したかった）メッセージが要約されている。すなわち、ほかならぬ人類こそが、この地球という惑星最悪の寄生生物であることを、人類は自覚すべきである、というわけだ。人類に豚肉や鶏肉を提供する豚や鶏たちにとつて、人類こそがこれらの「寄生獣」であることは、あまりに明白な事実だ。とはいえ、その事実を人類は、あたかも人類がその家畜たちと共生していると解釈することで、いわばごまかしてきた (vol.6, p.121)。「寄生獣」という虚構、それは家畜の思想を疑問視し、「寄生獣としての人類」という真実を明らかにするため

の仕掛けであった。そして特殊部隊による寄生獣の大量殺戮は、結果として、人類の執拗な異物恐怖と残酷な殺戮本能をも暴露してしまう。

7

しかし、ここでは皮膚という話題に注目して、この

うして寄生と保護との関係が転倒し、吸血鬼は聖母となって死を迎える。寄生生物だったはずの存在が、ここでは赤子を包む子宮の隠喩へと置き換えられる。この逆転は、まさにこの、皮膚の、宗教的ともいってよい変容を通じて達成されるわけである。

ふたつめに、ミギーもまた、少年が生き延びるために、自らを犠牲にする。寄生獣を一匹一匹と殺戮してゆくことなら、あるいは不可能ではなかっただろう。しかしこうした絶滅作戦に対抗するために、今述べた「女性」の寄生獣は、自分の最期の前に、五体の寄生獣の合体からなる、無敵な「個体」を作製していた。この敵が、市庁舎の攻防で、人間側の特殊部隊を全滅させるわけだが、少年とミギーにとつても、この無敵の相手からの攻撃に耐えることは不可能だった。この最初から勝ち目のない強敵との最後の、騎打ちで、ミギーは自分を少年から切り離す、という意想外な戦術を編みだす。敵はその「無敵」を、五つの個体を一個の「頭」の独裁によって力で統御することに負っていた。これに村シミギーは、個人の分割可能性、という、自分と少年の特殊な関係に、最後の勝負を懸けた。この無敵の合体生物は、今は亡きソビエト連邦や、また力づくで統合した国家の比喩と見ることも可能だろう（ちなみに、最近「Dis-united States of America」という本が、



fig. 4
岩明均『寄生獣』第8巻、講談社、p.83
©岩明均 講談社アフタヌーンKC



fig.5-1
「慈悲の聖母」図像を応用した墓碑の例、サン・ミニアート・アル・モンテの墓地、フィレンツェ、筆者撮影



fig.5-2
ピエロ・デッラ・フランチェスカ『ミゼルコルディア祭壇画（部分）』

ちよつとした評判を取った。だがこの策略をもつてしても敵を倒すことはできず、ミギーは次善の策として、少年にたいし、蜥蜴の尻尾よろしく自分を見殺しにして逃亡することを強制する。少年にとって自分の右腕の喪失は、いわば自分の己の内なる他者の喪失をも意味していた。こうして個と集合との弁証法の謎を突き付けたあたりで、物語は急速に悲観的な色調を帯びるにいたる。

8

このあと、最終巻にいかんどうでん返しや揺り返しの顛末が待っているか、それは原著者との知恵比べ、読者ひとりひとりのお楽しみに取っておこう。その代りに指摘しておきたいのは、ここで皮膚の領有を巡って、両立しない倫理観の対立が描かれていることだ。かたや個というものの掛け替えのなさを説く考え（「ひとりひとりの命は地球よりも重たい」）。他方には生態系全体の均衡を優先させる全体論な世界観。後者からみれば今や人類が地球の毒であり、寄生獣がこの毒を中和するための必要な治療薬だ、とする解釈も可能だろう（vol.3, p.204; vol.10, p.10, p.12）。だが例の妊娠した寄生獣は、はたして自分の腹にいる胎児が「毒」なのだろうか、と自問する。作者自身、脱稿のちの後書き

ーを引き起こす化学物質は作られない。ところが戦後、日本の衛生環境が「改善」され回虫が駆除されたことが、皮肉にもアトピー性皮膚炎や、花粉症に苦しむ過敏な皮膚を作りだしてしまった訳である。

またこれもほぼ時期を同じくして、免疫学の多田宮雄は、これまたベストセラーになった『免疫の意味論』（青土社、1994年）で、衛生学の発達と抗生物質の発達がアレルギーの蔓延を引き起こしたことを、読書人たちに納得させた。環境にありふれて存在していたバクテリアや抗原が減少してしまったために、免疫機構はその通常の敵を見失ってしまった。抗原との共生が微妙な均衡を取っていた環境は、戦後急速に破壊されてしまった。その替わりに、先進諸国を中心として、前例を見ないほどの無菌ないし減菌を施された皮膚環境が広がってしまった。このバクテリア嫌いの強迫観念——とりわけドイツと日本に著しく、抗菌グッズの流行や「お父さんは臭い」が、その発現形態といえるだろう——のなかで、もはや抗原との共生はありえず、免疫機構はとるに足りない環境の変化にも、大袈裟な拒絶、過剰な反応の兆候を示すようになった。

で、このジレンマをいかにして乗り越えるかに苦しんだことを告白している。だがこの対立する倫理観の一方に安易に軍配をあげるかわりに、寄生獣という虚構を利用して、両者のせめぎあいの可能性を徹底して追求できたゆえに、著者は共生のうえにたゆたう束の間の結節点たる「己」のありかたの不安定さを、豊かに分節することに成功した。著者自身白状するとおり、最初は短編の学園ホラーもので終わらせる予定が、途中から登場人物ならぬ生物たちが勝手に生命をもって動き始め、收拾がつかなくなった、という暴走事故も、作者には幸いした。

同じころベストセラーとなった『笑うカイチュウ』（講談社、1994年）で、著者藤田紘一郎は、興味ある仮説を展開した。寄生虫学者藤田博士によれば、ほんの30年前には日本人の多くが腸内に飼っていた寄生虫、回虫が、実は人々を花粉症やアトピー性皮膚炎から保護していたことになる。幼いころ回虫に寄生されていた子供は回虫の分泌物にたいして抗原抗体反応を起こし、immunoglobulin E (IgE) を生成する。これらのIgEのほとんどは活性がなく、好塩基球や肥満細胞と呼ばれる白血球の表面を覆っている。この場合、スギ花粉や粉兵タニといった抗原との接触であらたに「回虫が体内で作られても、それらは白血球と結びつかず、アレルギ

寄生虫から自由でありたいという衛生強迫症は、決して民族浄化の強迫とも無縁ではない。どちらも不純物の駆逐を自己目的とするからである。それが『危険な純粋さ』(La Pureté dangereuse)である、という限りではベルナル・アンリ・レヴィは間違っていない（立花英裕訳、紀伊国屋書店、1996年）。だがさらに、天敵や寄生物を根絶やしにしてしまうと、その先には自己免疫症という自己破壊の悪夢が待ち受けている。近代ヨーロッパでユダヤ人や「ロマ」人、ポーランド人が民族浄化というテロルの犠牲者となったのにも似て、いまやイスラームや儒教世界が、また場合によっては日本やアジア圏が、世界の楽園ならぬ、寄生虫扱いされかねない状況も生まれている。

だが肌荒れを防ぐには、寄生虫や細菌との共生が必要不可欠だ。岩明均の『寄生獣』は、今日の世界に蔓延しつつある浄化症候に対して警告する寓意として（も）、重要な作品のひとつである。皮膚を巡る美学的考察と並んで、また皮膚の政治学をも提唱したいと考える。

(1997)

「いなが・しげみ」国際日本文化研究センター／総合研究大学院大学助教授・美術史。18世紀以降の日本における西洋美術の受容と、近代西洋における日本の影響についての研究。著書に『絵画の黄昏・エドワード・マネ没後の闘争』（1997）、「絵画の東方 オリエンタリズムからジャポニスムへ」（名古屋大学出版会、1999）、「異文化理解の倫理に向けて」（同、2000）など。

How to do things with a Parasite:
Kiseijū by IWAACKI Hitoshi (1990-Feb.1995)
or A Vision of the Dividable Self in Contemporary Japanese Comics
Shigemi INAGA International Research Center for Japanese Studies, Kyoto

p.028 - 033

This text first appeared at, *The Imagination of the Body and the History of Bodily Experience* (International Symposium No.15 2000), International Research Center for Japanese Studies 2001.

Ethnic cleansing is an obsession we tend to be possessed by at the post-colonial situation after the fall of the Berlin Wall in 1989. The once dominant dichotomy between Western Free nations and Eastern Socialism gave way in the 80s to another schematic and no less fictional opposition between the "terrorism" of the "Holly Islam" and the defense of democracy by the secularized American "Evil Empire." It must be reminded that the Japanese translator of Salman Rushdie's *Satanic Verses*, Hitoshi Igarashi, an eminent young islamist, was assassinated on July 14, 1991, precisely in this double-bind of the civilizational crash. Samuel P. Huntington's hypothesis of the possible clash of Western Civilization with the Islam-Confucian connection in the near future is still exercising a prevailing effect on the Washington foreign policy makers. In the meanwhile, the pursuit of ethnic purity, for the sake of ethnic purity came to the agenda of many political leaders eager to establish their hegemony out of the yoke of multiple ethnicity.

IWAACKI Hitoshi's comic story, *Kiseijū*, or Parasite-beast, completed in 1995, offers a far-reaching insight into the hidden xenophobia of the contemporary Japanese society, and widely appreciated among literary critics and sociologists. Although comics are still usually disdained among Japanese intellectuals, Tsurumi Shunsuke even confesses that in his life of 73 years no book but one has seized him so tightly. I myself find this story a remarkable example when one makes a reflection on the "Körper/Teile" and thinks about the "Spaltung der Identität" or the "gespaltene Identität." Why was this story accepted so enthusiastically in Japan? Why is a fictional parasite relevant to reveal some of the blind spots in questioning the ethics of our time? By analyzing some plots of the story, in reference to the dichotomy between "Teile" and "Ganze," this paper tries to answer to these questions.

1

One night, unknown extra-terrestrial creatures as large as the tennis balls suddenly begin to fall on Earth. From every incubated ball appears a worm

like a snake with a drill on its top. By instinct they try to penetrate into the brain of a sleeping human being found near-by. Most of them succeed in taking over the host's brain, and by eating up the head from the interior, they replace the heads of their hosts by their own tissue. Thanks to their elastic body, they imitate their hosts' original physiognomy. By disguising themselves as their host, they apparently keep recipients' identity. But the original brain does not remain anywhere. And, of course, recipient's personal identity is lost once for all. Each host's Body is now controlled by the will of the alien occupant.

From the following morning, atrocious killings begin to take place, when the parasites begin to feed themselves with the nearest human-beings they have found. Wives and children are suddenly attacked by what they still believed to be their husbands and fathers, and so forth. There are thousand of these fake human-beings which suddenly appear on earth, although their invasion are not yet been clearly noticed as such by human beings. On the mass-media, the hideous cases of 'hashed meat human killing' are reported.

Here was, however, one accident which prevented the fulfillment of the initial program. One of the worm like creatures fails to penetrate into the brain of a boy, as the boy, awakening, notices that something strange is happening to him. The worm jumps toward the head of the boy but the boy's hand prevented the worm from reaching its destination. The ex-terrestrial creature is forced to give up taking over boy's brain and is obliged to remain instead in the right arm of the host. By the morning the worm has replaced the host's right hand in its entirety. But it is a "failure" for the creature, for he has failed to "kidnap" and destroy the boy's brain. And the host is of course furious of his parasite's having eaten up his right hand and arm, which no longer belong to him. At first the boy furiously tries to kill the parasite, but in vain. With its super-natural elasticity and high ability of transformation, the monster easily breaks off the knife with which the boy has tried to attack it.

In this boy's confused reaction to his (?) new right hand and arm, we can certainly see a profound ambiguity which remains unquestioned in the practice of medical intervention. On the one hand, it will be easy to see this parasite as a metaphor of cancer. The modern surgery consists of eliminating

the malignant tumor from the body, in order to restore health. Still a massive amputation, causing handicap, seriously deteriorates patient's living conditions. On the other hand, the parasite can be regarded as a transplanted specimen. The transplantation is strongly promoted by surgeons, in case there is no other way for the survival of the patient. In order to facilitate transplants, a new guideline was introduced in Japan in 1997, which recognizes the brain's death as the death of the individual, and which provoked controversies. Thus one's transplanted organ obtains more chance of survival within and under the body of another person.

Between mutilation and transplantation, two contradictory desires seem to co-exist. If the former seeks for a purification by physical operation, the latter promotes symbiosis of heterogeneous elements against the nature of the immune system. By presenting a parasite simultaneously as a cancer to remove and as a prosthesis to transplant, Iwaaki's comic story sheds light on this ambiguity in medical ethics and questions the propriety of the treated organs. To whom does the transplanted organ belong? A question which the medical ethics has tried to conceal under the skin of a body.

2

Indeed, we can no longer say for sure, in this story, which is the donor and which is the recipient. For the boy, his right hand and arm are a parasite which, however, he cannot remove. For the extra-terrestrial creature, what is superfluous is the brain of the host's body on which it has transplanted itself. Despite this mutual inconvenience, both of them recognize little by little that they are mutual dependent. However hostile its host is, the parasite cannot live without its host (here it would not be superfluous to recall, with René Schérer, that "host" and "hostility" shares the same etymological root with "hospitality", which also accounts for the uneasiness of being hospitalized). The same is true to the host: however his right hand has become disobedient to him, it is useless and disadvantageous to lose his right hand. Still, it is one thing to understand the necessity of cooperation; it is quite another if the cooperation actually works.

Serious but somewhat comical quarrels and conflicts take place between the boy and the monster, as two different identities and wills are

forced to co-exist on the one and the same human body. The monster occupying the right arm of the host is busy learning everything of human society and rapidly obtains necessary knowledge and language skill. Full of curiosity, he reads through encyclopedia and imitates even bird's anatomical physiognomy by his elastic and transformable body, while the host complains about the fact that he has to clear the table after his parasite's enthusiastic reading by which it scatters everything around himself (vol. 1, p.45). (For the sake of comprehension of the images, let me remind you here, that in the Japanese comics the story goes from above to below and from right to left).

Here, the author of the comic demonstrates unexpected talent of imagination in the depiction of such details when, for example, the boy meets his girl friend. His right arm suddenly transforms itself into a huge phallus, faithfully or fancifully reacting to its host's hormone secretion. Here the parasite appears as an exaggerated synecdoche of the male genital organ, which is made of elastic skin stuffed with sponge like tissue. In fact the parasite is at the same time curious of the sexual instinct of the human beings and is irritated by the too reticent and hesitating behavior its host takes toward the high-school girl. "It is a pity that I could not observe the human intercourse. It is no good for your health to refrain from doing what you want to do. You know your health is also my own", the right hand preaches in this way to the boy (vol. 1, p.58).

Further, the right hand even tries to cause election to the boy's genital organ against the will of the host, while he is (or they are) in a public lavatory. "Stop it, this silly guy!" shouts the boy, "It's cold, the water!" The right hand complains. "Shut up!" boy ripostes. Their dialogue looks like an insane monologue, and surprises boy's school-mates. For the boy's confusion, even the forced ejaculation is reduced to be a shameful exhibitionism of masturbation practiced in public...(vol.1, p.54). (in parathesis, the plot reminds us of another novel by a young female writer, Matsuura Rieko. In this novel, *Oyayubi P no Shugyo-jidai* ("Das Lehrjahr der Grosse Zehe P")(1996), the big toi of the female protagonist transforms itself into a penis.)

In the meanwhile, the boy, lead by some progressing intimacy, concedes to name his parasite "migy", apparently stemming from "the right side" [migi] in Japanese. The parasite, Migy, on the

other hand, refuses to be regarded as a pet animal of the boy, but gives him back the command of his "own" right hand while it want to sleep by his will (vol.1, p.46, 65-66). "I sleep now. Treat your right hand carefully", it says to the boy. By trial and error, Migy also learns little by little how to avoid putting the boy into useless trouble. To put down possible suspicions, the boy's "right arm" should not show any strange behavior. It is out of question to transform it in public spheres, without respecting human body's anatomical limit. For their own safety, not only Migy itself but also the boy must keep secret "Migy" 's existence even from his family. By this strange "co-habitation", the boy also recognizes, to his own surprise, that he is now gifted with super-human power in his right arm. The fact inevitably affects the personality of the boy. Once again it is not without interest to mention that the so-called Tamagocchi goods were popular when the comic stripe was in its making. Disobedient pets gadgets, which manifest its own will, even against the human master's wish, have become attractive and welcomed from the mid 90s, ultimately resulting in the robot dog, which was put into commercial market by Sony in 2000.

3

The symbiosis of two identities on the same body has a real model in the Siamese twins. The freak has since long stimulated the imagination. In the case of Tokugawa Japan, Santō Kyōden is known to have written in 1788 a comical story of Yellow cover book (*Kibyōshi-bon*) about the psychological conflict of a Siamese twin (*Soritsugi Gin Giseru*: translation impossible). A man, named Hanbei and a woman, named Onatsu shares a body, which causes them interminable troubles until they were successfully separated by a Nagasaki Dutch style surgeon, who put Hanbei's head on a dead body of another man. In modern times, Hagio Moto's comic, *Hanshin* (Divinity Separated into half), tells a story of the two sisters born as Siamese twins. Once separated each other by surgical operation, the one who has been beautiful dies an ugly death, while the other who has believed herself ugly, survives, to her own surprise, as a beautiful lady. This love-and hate psycho-dram was mounted on the stage by Noda Hideki in 1986 and enjoyed a high reputation. Later, Hagio developed the same framework into the love-and

hate ambivalence between a beautiful mother and her baby who believes herself to be the reincarnation of an Iguana, a huge lizard living in Galapagos Islands.

The only existing specimen of Pushimi-pullyus, a creature invented by Hugh Lofting, as a thoughtful and modest animal with two heads, which accompany Dr. Dolittle in his voyage to Africa, is given the name of Oshitsu-Osaretsu, in Japanese by Ibuse Masuji (author of the novel on the Hiroshima Atomic bombing, *The Black Rain, Schwarz Regen*). A more advanced specimen in evolution, or a Japanese variant (as in this case two heads speak simultaneously) is recently found by Horie Toshisachi in an illustrated book for children written and illustrated by Sasaki Maki: *Do you know where the pink elephant is ?* By the way, it is curious to note that the débacle of the Austria-Hungary Empire, which had the emblem of two headed eagles, coincided with the disastrous end of ethnic co-existence in East Europe. This coincidence suggests what is implied in the iconography of the siamese twin allegory. Incidentally, in a fantastic novel by Satō Aki, *Peregrination of Balthasaar*, which won the third Grand Fantasy Novel Prize in Japan in 1991, is also based on this historical and geopolitical context of the lost Austria-Hungary Double Empire. The protagonist of this novel is a *Doppelgänger* who incarnate(s) the duplicity of his own existence under the threat of massive human slaughter and genocide by the Nazi invasion...

What makes Iwaaki's comic different from these precedents as well as ordinary Hollywoodien "alien-monster" stories ? The difference lies in the fact that the protagonist is (or are) a chimera like mixture of an extra-terrestrial and a human boy, and that they are doomed to behave themselves as an individual by concealing their plurality. The identity of Migy consists in hiding itself by perfectly playing the role of the host's right hand (this makes the comic story fundamentally different from the short surrealistic novel, *Kataude* (Arm), by the old Kawabata Yasunari in 1964, who fancied a detachable arm). Migy must be concealed in the skin of its host ("dans le peau de l'autre"), in such a way that we have a grammatical difficulty in determining whether we should use plural or singular, to name "it", "him" or "them". To suggest Migy's uneasiness, the German expression is relevant: "Ich mööchte

mich in seiner Haut nicht stecken."

Two points must be made on this intentional indeterminability. One, the well-known *Doppelgänger* situation gains here new significance. On an individual body live two independent identities. But these two different identities are not the less mutual dependent. Socially behaving as (or at least trying to behave like) an individual, their private self is divided (cf. Ronald David Laing's *Divided Self* [1960]). The self-evidence of identity is blurred and becomes object of constant conflicts. But in observing these conflicts, questions come to our mind. What is "I" which pretends to be individual? Is the integrity of a self so self-evident as we tend to believe? Is the split personality a psychotic trauma the patient has to overcome? etc. It is not superfluous to add that the idea of a boy with his eye-shaped partner is explicitly inspired from Mizuki Shigeru's famous comic story of hobgoblin boy Kitarô, whose left eye, believed to be his father, lives in and out the left eye socket of his son. (One may suspect if this was inspired by Georges Bataille's *Histoire de l'oeil*, though the answer of the author is negative on this point). Here, the integrity of the self is sustained by the subverted mutual dependence, which also defies the universality claim of Freudian hypothesis of Oedipus complex.

Two, it is already clear that the story contains, in its framework of a scientific horror fiction, some fundamental criticism to the (Western) hygienic policy. In this story, parasite is not regarded as something to be exterminated or eliminated as an absolute evil enemy which threatens the integrity of the hero or heroin (like the case of these intruders in American Hollywood film of *Terminators*, *Robocop* or early *Alien* series). Instead, in this *Bildungsroman*, the parasite is interpreted as the indispensable partner for the fulfilment of the young protagonist's personality. The symbiosis with the parasite seems indispensable for the self-formation of a full-fledged individual. Interestingly enough, this view coincides with the latest discovery in the medical studies of immune system and seems to be supported by parasitologists. However, before touching upon this problem, at the end of the paper, we have to make some other preliminary remarks.

4

Now we are only at the end of the first volume of the story composed of ten volumes. For

the sake of comprehension, let us summary three main frameworks of the story. The main trouble with the parasites is that they feed themselves with the fresh human body. It is true that the sensational minced meat human slaughters cases gradually disappeared. Instead, however, increasing number of mysterious disappearances or unreasonable missings are reported (what the Japanese called *jôhatsu*, or "evaporation".) The parasite has studied, in the meanwhile, the safer and cleverer way of obtaining their food in secrecy. And yet, despite this apparent "socialization", the human huntings are still going on without being noticed.

Secondly, while the parasites spread throughout the human world, some eye-witnesses inevitably appear. To eat human body, the parasite has to stop disguising into human figure and transforms its head-part into a monster-like mouth with fangs for mastication. It was impossible to conceal perfectly this transformation from human-eyes. Finally an individual fails to keep his true nature in secret, and carelessly tries to kill the eyewitness. Counter-attacked by sulfuric acid, however, it loses its brain self-control and provokes a massacre in a high-school. To stop the slaughter, the boy and Migy in cooperation throws a stone to the breast of the insane parasite. The stone thrusts through the human chest, leaving a huge hole. To kill it, the only effective way is to destroy the host's human heart. By this incident, however, the monster's body is finally captured by human beings, as an irrefutable evidence of their horrifying existence. Investigations are taken place in secret, to solve the mystery of this unrecognized and dangerous creature.

Thirdly, the boy is the only human-being who knows so far the truth of these incidents. Therefore, his existence was regarded by other parasites as an imminent danger to them. A simple breaking of their secret by the boy could easily endanger their whole existence. For their own safety, the "normal" parasites decide to kill this "mutant" individual. The police also marks this important eyewitness. Here is the common destiny of the mediator, who is to run the risk of being regarded as dangerous from both sides. Like the bat between the realms of birds and animals in the *Aesop's Tales*, this "mutant" individual, half parasite and half human, plays a privileged but risky role between the two antagonistic sides. As the story advances, the

tensions grow up rapidly.

5

Yet, it is not our intention to deprive our audience of the pleasure of reading this breath-taking story. Instead, we concentrate our attention on the messages the author slipped in the details of the story. Let's have a closer look at the nature and characters of the parasite. As for the relationship between human-being and parasite, three points must be made.

First, as for the instinct of eating human body. One parasite remarks that it received the imperative of killing the human species at the moment it invaded human brain. Migy confesses for its part, "This furious emotion to kill does not exist in me, who haven't robbed the human brain" (vol.10, p. 129). We are also informed that Migy itself does not have any hunger nor need of eating human body, so long as it is alimented by its host (vol.1, p.148). It becomes clear that only those parasites which have devoured human brain are imprinted with the instinct of exterminating the human beings. By these, the author seems to suggest that the instinct of killing is not programmed in the parasite as its inheritance but was transmitted to it from the human brain it devoured.

This setting reminds us of the hypothesis advanced by some anthropologists in terms of the origin of the human species. In his *A View to a Death in the Morning, Hunting and Nature Through History* (1993), Matt Cartmill examines the mythological, ideological and cultural backgrounds of the "killer ape" hypothesis, which was propagated by some post-World War 2 Western natural anthropologists studying the human evolution. This hypothesis was based on the idea that human species was born at the moment when some anthropoids began hunting and killing with weapons at their hand. According to this idea, which Robert Ardrey named "hunting hypothesis", we cannot account for the history of human being without taking into account the hunting. Konrad Lorenz's best seller, *The Aggression (Das Sogenante Böse. Zur Naturgeschichte der Aggression, 1963)*, also reflects this tendency of the evolutionary psychology in the 60s. Ardrey even defined the human being as "predatory animal with the innate instinct of killing with the help of self made weapons". In the story by Iwaaki, it

seems as if the parasite were programmed to penetrate into human brain so as to obtain this unknown instinct of aggressivity from that which it is now entitled to devour.

Second, as their symbiosis goes on, the boy and Migy also begin to change their mentality. In the volume 2, the boy's heart has been destroyed by the attack of a parasite, disguised in his mother. To save the life of his host, Migy divides itself to substitute the broken human heart by its own tissue. With this operation, the boy, coming back to life, gets super-human power, while Migy diminishes its size by 30 per cent on the right arm and takes the human habitude of falling a sleep out of his control for 4 hours a day. The once rational and cold-blooded reasoning of Migy also takes a human touch.

A subtle example is found in their dialogue. "You know that the parasite cannot develop the sentiment of human affection". Migy says. "In case you endanger me by your affection of your girl friend...". "I understand" the boy replies. "I mean, Migy adds, you don't want to see your right hand kill a girl friend you love...". "Do you threaten me by that? You, completely lacking in affection", boy ripostes with anger. "But so, it is." Migy protests, quietly. Here, the last words by Migy betray what he means. By saying that he lacks in affection, the words undoubtedly show his affection toward the boy, and more generally toward the lives of every creature (vol.5, pp.86-87).

Third characteristic. As a creature, the parasite is curiously lacking in the capacity of reproduction (here is the fundamental difference from, say, *Alien* /*IV*, and I wonder if the author from the outset was fully conscious of the result his setting would ultimately bring about). As far as it occupies the head of a human body, the reproduced baby by the female human host logically belongs to human species. The parasite cannot intervene in the genetic memory of the host species on which they live. One "female" parasite finds it strange that she is lacking in the capability of transmitting her own gene to the posterity and questions its own *raison d'être*, as a creature. "Where did we come from, what are we, and where to?" (vol.7, p.228: here is, of course, the famous question Paul Gauguin asked in Tahiti). She also makes an experiment of intercourse with another "male" (the sex being that of the parasitized human body) so as to procreate a

human baby (vol.1.p.183).

Later the author of the story explicitly refers to the Richard Dawkins's idea of the "selfish gene" (vol.6, p.124), which was frequently discussed around 1995. From the genetic point of view, so long as the parasite is incapable of intervening into human genetic memory, it cannot be regarded as a parasite. A university professor explains in the story: "if our body is a marionette of our gene, then what matters are not the human species but rather "I" and "my" posterities which will transmit "my" gene". "Ultimately, this would explain all the altruistic behavior, like helper and care-taking behavior, affection to the family members and even the mother instinct itself." "In final analysis, we would be lead to the conclusion that such a thing like the mother instinct simply does not exist". However, the professor also suggests a weak point of this selfish-gene hypothesis by showing many examples of altruistic behavior among animals, insects and plants, which even do more harm than good to the survival of the gene in question.

The pregnant female parasite happens to find herself fitting in this category. As a matter of fact, the pregnancy and care-taking of "her" baby may be interpreted as a purely altruistic behavior (in Dawkins' sense), as it does not contribute to the prosperity of the parasite but rather endangers the parasite's own existence as an individual, in particular, and as a species, in extension. This scientific experiment of pregnancy, made out of mere curiosity, also begins to influence and change the character of this "female" parasite, as the story goes on.

6

While the parasite tries to find a way toward the symbiosis with human beings, the human-beings set up systematic manoeuvre of extermination of the parasites. The headquarter of the parasite, located at a city hall, is detected by the special commandos and armed troop raises the siege. Under the pretext of rescuing the citizens from a dangerous narcotic intruder, armed with a rifle, the army begins to lead the people out of the city hall to put them under the x-ray screening. If the head of the human skull is replaced by the monster, the x-ray image gives a shadow, thus allowing the army to find out and identify the parasite. It is enough –the army thinks– to shoot at the remaining human heart by the T-shot gun to kill the parasite, one by one.

In the x-ray screening, we can see a metaphor of the desire inherent in (Western) anatomy and dissection. As Barbara Duden has suggested, the Western anatomy cannot be satisfied with the surface of the skin, but tries to penetrate into the hidden depth of the body by way of cutting it up. Despite its sophistication, the x-ray screening also tries to reveal the hidden truth supposed to be concealed under the surface of the skin. The technique of the beholder (Jonathan Crary) consists in penetrating into the invisible and visualizing what has remained invisible. This desire of "visual penetration" so to speak, seems to be criticized by our Japanese comic author. For, in the story, the military manoeuvre of the x-ray screening is doomed to failure...

Three factors trigger the failure. And all these factors are related to altruistic behaviors. First, the mayor, who has been supposed to be the leader of the parasite, sacrifices himself.

Before being shot like a bees' nest, the mayor gives his final conference in front of the army. He refuses any idea of environmental protection or the movement for the prevention of cruelty to animals. All these measures are, according to him, nothing but deformed expressions of human egoism. "While preaching the harmony on earth, the ecological movements contribute, in reality, to the destruction of the earth's nature. For, the worst parasite on earth is nothing other than the human-beings." "The so-called parasite is accomplishing the sacred mission of eliminating the over-populated human species, so as to restore ecological balance on earth for the future of all lives..." This somewhat naive and dangerous warning is of course scornfully ignored by the soldiers who shot this supposed leader of the parasite, disguised in mayor. And to their surprise, the body is revealed to be that of a human-being.

As a human being, the mayor would have been able to survive, if he wished, by safely passing the x-ray screening. And yet he sacrificed himself for the cause of the parasite with the following will: "Human beings, you shall learn before long that how important your own natural enemy is [occupying a superior position in the natural kingdom]. It is your duty to protect the parasite". At best, it could not be anything other than a parody of the statement by an ecology fundamentalist. Ironically, however, the massacre of the parasite, carried out by the army in horror,

bears witness to the brutal nature of human species, which has no other aim than to mercilessly annihilate any creature which menaces human existence.

On a rather superficial level, here is a simple message that the author wanted to transmit to the leaders of the story. "The human-beings have to keep in mind the fact that they are the worst parasite on earth. For the pigs which provide pork, the human beings are no better than parasite. And yet both of them can be understood as co-existing in symbiosis, from wholistic point of view" (vol. 6, p.131). The parasite is created by the story-teller to reveal this simple truth. Yet, there still remain at least two other lessons we can learn from this fiction. Both of them are also related to the act of sacrifice taken by the parasites, which can be understood in terms of altruistic behavior (as is mentioned earlier).

7

Secondly, the "female" parasite, which made the "epiphanic experience" (Barbara Duden) of pregnancy, is going to give birth to the human baby gradually begins to understand human sentiment. In front of the boy's girl friend, who is worried about his life and safety, the parasite heaves a sigh, saying "Is it an envy if I wish I could share your affection?" (vol.8, p.18). Later, she is surprised by her own irrational behavior of uselessly killing a detective when the detective has threatened to kill "her" baby in revenge of his massacred wife and daughter. Half knowing that he is menacing "her" only to give "her" a trial, the parasite cannot suppress a kind of mother instinct arousing in her, and desperately tries to save "her" baby at the expense of "her" own safety.

The murder of the detective is a fatal error, and "she" is welcomed by the shower of bullets by the police agents. With "her" capacity of killing, it would have been easy to survive, but "she" gives up fighting and sacrifices herself for the survival of "her" baby (vol.8). To protect the baby from the bullets, "she" transforms "her" hair into a cocoon like shelter. This reminds us of the mantella of the Madonna Misericordia of the Christian iconography. (Hubert Damisch's Freudian interpretation shows in reference to the Jewish tradition, that a niche like chamber hidden behind Madonna's mantella is self-evidently a metonymical substitution of the foetus,

while the mantella which hides the interior being the substitute of labia.) Thus the parasite transfigures itself into a protecting cape to secure the human baby. (One may also recall Günter Grass's *Die Blechtrommel*, where Oskar finds a mixed feeling of safety and sexual excitement when he hides himself under his grandmother's skirt). The relationship between parasitism and protection is reversed here, and the vampire dies as the Holy Mother. This "consecration" is realized by the religious and theatrical transubstantiation of the "object"(in the sense of Julia Kristeva) into a sacred relic.

Before expiring, the "female" parasite entrusts with satisfied countenance the care of this "usual human baby" to the protagonist school-boy. It seems as if she had understood her *raison-d'être* by showing an example of the altruistic behavior (as was explained, in the story, by a university professor of biology, in reference to Dawkins' selfish gene hypothesis). While the boy muses upon "her" last words of gratefulness to the boy's acceptance of "her" baby, Migy is confused by this "foolish" self-sacrifice.

Third, Migy also sacrifices itself for the survival of the boy. It would have been easy to kill, one by one, the hostile parasite. But the dead "female" parasite had prepared, before her death, an invincible creature composed of five parasites (the invention of the composed giant body seems to be attributed to Japanese comic authors, like Nagai Gō, the latest incarnation of which being the world-wide best selling animation feuilleton, *Evangelion*, by Anno Hideaki). For the boy and Migy, it is out of question to overcome the attack of this formidable enemy, which has massacred all the armed forces at the city hall carnage. In the final duel with this foe, Migy takes an unexpected strategy of separating itself from the boy. If the foe owes its invincibility to the united-ness of four individuals under the forced command by the one occupying the head, Migy trusts, in contrast, on the dividability of the individual into two independent parts.

The historical circumstances would permit us to suppose a geo-political background subconsciously imprinted in this confrontation between the dividable self and the unified political body. With the dissolution of the Soviet Union, people felt disillusion to the dream of the forced union of world-wide communism, which proved to be a type of collective dictatorship. Even in North

America, a book with the title of *Disunited States of America* has recently become quite popular. French philosopher Jean-Luc Nancy proposed an *Être singulier pluriel*, to question the conventional Western idea of the human being as an individual/indivisible entity. In his *La Pureté Dangereuse*, Bernard Henri-Lévy also pointed out the danger of the quest for the singular purity for the purity's sake. It seems as if the effort of maintaining a united political body by force definitively gave way (even on the level of nation-state building) and the state of being constantly contaminated by parasites has become the alternative of the post-cold war, post-colonial era.

To turn back to our story of the boy and Migy, however, even with this strategy of dividing the self into plurality, Migy fails to kill the foe, and for want of better solution, Migy finally save the boy's life at the price of its own. In its vanishing consciousness, the dying Migy finds its final satisfaction. At this self-sacrifice by the company parasite, the boy also recognizes what he has shared with Migy. The loss of his right arm also means the loss of the other in his own self, without which he can no longer maintain his integrity as an individual. Suddenly the story takes a pessimistic and tragic tone, at the end of the volume 9....

8

I have to refrain from telling what kind of reversals, upside-downs and table turnings are still waiting for the readers in the final volume 10. Instead, let us see what is at stake in this fantastic story in terms of the imagination of the body. In final analysis, a question is raised in front of two incompatible ethics. One, based on the dignity of the irreplaceable individual and the other which gives priority to the holistic equilibrium of the environment. From the latter point of view, it is human beings which is the poison of the earth, and the parasite can be regarded as the necessary remedy to neutralize this poison on the planet's eco-system (vol. 3 p. 204; vol. 10, p.142). Still, the pregnant "female" parasite wonders, if the baby "she" has conceived is a poison... The author confesses in the afterwords to have struggled to overcome this dilemma in search of the final denouements of the story. Yet it is in this dilemma between the two antithetical choices (or two incommensurable ethics) that the author

successfully articulates the instability of the "self" which fluctuates in the symbiosis with others.

To understand better the ethical implication of the politics of the body in this story, it would be helpful to cast here a glance on the recent development of immunology and its impact on wider range of reading public.

In his best-sellers, *The Laughing Ascarid* (1994), Dr. Kōichirō Fujita, of the Tokyo University of Medical and Dental Studies, advances an interesting hypothesis. According to him, Ascarid, a parasite living in the human intestines, which still prevailed in Japan 30 years ago, has prevented the people from being attacked by the atopic skin inflammations or the cryptomeria pollen allergy (analogous with hay fever, or Heuschnupfen).

A person having been contaminated in childhood by the ascarid retains the immunoglobulin E (IgE) which has been produced in reaction to ascarid's excretion. Most of the immunoglobulin E is inactive and covers the surface of the cells known as basophile leukocyte or mastocyte. Thus even the new immunoglobulin E is later produced in reaction to such allergen as cryptomeria pollen or the dog ticks (*konahyōdani*, in Japanese) it cannot be combined with leukocyte or mastocyte. So the production of chemical trigger to develop allergy is prevented.

Ironically enough, therefore, the extermination of the ascarid by the Japanese hygienic policy in the last half century contributed to the development of atopic skin diseases among many contemporary Japanese. Tada Tomio, one of the Japan's leading figure in immunology, also argues in his best-seller *Semiotics of the Immune System* (1994), that the improvement of hygienic conditions and the development of the antibiotics have provoked prevailing allergy. Because of the decrease of usual bacteria and antigen, the immune system seems to have lost its conventional enemy. The environment of symbiosis with the antigen in a subtle equilibrium has been rapidly destroyed. Instead, an unprecedented aseptic germ-free condition is created among the advanced countries, like Japan and Germany. In this obsessive bacteria-phobia, any possibility of symbiosis is rejected by the contemporary Japanese, even mentally, as the wide spread demand in the consumer market for the anti-bacterial stationary goods [*kōkin guzzu*] proves. In this condition, the immune system begins to show

symptoms of over-reactions to, and excessive refusal of, the slightest change in the nature. Tada Tomio also warns us by saying that the extermination of natural enemies and parasites eventually results in the occurrence of self-destructive auto-immune diseases [*jiko-men'eki byō*], the symptom of its unprecedented increase being already reported.

The obsession of parasite-free hygienics may also be understood as a metonymical expression of the obsession of ethnic cleansing, based on the illusion of ethnic purity (and in this sense—and in this sense alone—, Bernard Henri-Lévy's warning of the *Dangerous Purity* is relevant). According to Huntingtonien dichotomy, combined with the discussion on the global standard of the 21st Century world system, the Confucian East-Asia as well as the Islamic world, which remain incompatible with the Western value system, may be regarded as parasites of the planet. As an aftermath of the destiny of Jewish and Polish peoples, who have fallen victim of extermination and holocaust during the WWII, the horror and obsession of ethnic cleansing is constantly spreading in the world today (especially from the 90s). Iwaaki Hitoshi's story of the alien parasite can now be understood also as a parable of warning to this utopian dream of parasite-free paradise and serves as an antidote to the globalizing "puritan" paradigm of the New World Order. Here is also a symptom against the so-called global standard fundamentalism of the opening millennium.

To conclude in a frontal and conscious violation against the pretended "politically correctness", let us evoke a cosmetic metaphor. To prevent skin trouble, women know very well that a symbiosis with some sorts of bacteria is indispensable. Iwaaki's story proposes a new insight into the hygienic of the skin, and opens up, I hope, an unprecedented perspective to the politics of bodily imagination which we should elaborate for our own mutual symbiosis. Incidentally, Murakami Ryū, a highly popular Japanese novelist, whose Coin-Locker Babies is available in English, has just published two weeks ago (on April 2000), a new novel with the title, *Kyōseichū* (*Symbiotic Beast*), to reveal an autistic mentality of a youngster who suffers the delusion of persecution under the spell of the computer manipulated information society.

References:

- BATAILLE, Georges 1970 "Histoire de l'oeil, 'Dossier de l'oeil pinéal", in *Oeuvre complètes*, Tome I, II, Éditions Gallimard
- CARTMILL, Matt 1993: *A View to a Death in the Morning: Hunting and Nature through History*, Harvard University Press
- CRARY, Jonathan 1990: *The Techniques of the Observer*, The MIT Press
- DAMISCH, Hubert 1997: *Un Souvenir d'enfance par Piero della Francesca*, Seuil
- DAWKINS, C. Richard 1976: *The Selfish Gene*, Oxford University Press
- DUDEN, Barbara 1998: *Geschichte unter der Haut*, Klett-Cotta
- FUJITA Kōichirō 1994: *Warau Kaichū* [The Laughing Ascarid], Kōdansha
- HAGIO Moto 1995: "Hanshin" [Divinity Divided into Half], Hagio Moto Sakuhinshū [Collected Work by H.M.] vol.9, Shōgakukan, pp.3-18
- HAGIO Moto and NODA Hideki 1987: *Hanshin* [Divinity Divided into Half], Shōgakukan (theater version)
- HAGIO Moto 1994: "Iguana no Musume" [Daughter of an Iguana] in *Iguana no Musume*, Shōgakukan, pp.5-54
- HERMAN, Judith 1992: *Traum and Recovery*, 1997: Basic Books
- HUNTINGTON, Samuel P. 1993: "Clash of Civilizations?", *Foreign Affairs*, Summer, vol.73
- IWAOKI Hitoshi 1990-1995: *Kiseijū* [The Parasite-Beast], January 1990-March 1995, in 10 vol., Kōdansha
- KAWABATA Yasunari 1964: *Kataude* [A Girl's Detachable Arm]
- KIMURA Hiroshi (et al.) (ed.) 1999: *International Negotiation: Actors, Structure, Process, Value*, St. Martin Press
- LAING, Ronald David, 1960: *Divided Self, A Study of Sanity and Madness*, Tavistock
- LÉVY, Bernard-Henri 1994 *La Pureté dangereuse*, Éditions Grasset et Fasquel
- LOFTING, Hugh 1920 *The Story of Dr. Dolittle*, Japanese translation 1967 by IBUSE Masuji, *Dōtoru Sensei Afunka Yuki*, Iwanami Shoten
- MAKI Yūsuke 1993: *Jiga no Kigen* [Origin of the Self], Iwanami Shoten
- MIZUKI Shigeru 1966; 1988 *Ge-Ge-Ge no Kitarō* [Hobgoblin Kitarō], Chūōkōronsha
- NAGAI Hitoshi 1991 *Tamashii ni tasuru Taido* [Attitude toward the Soul], Kessō Shobō
- NANCY, Jean-Luc 1996 *Être singulier pluriel*, Galilée
- SANTŌ Kyōden 1788 *Sontsugi Gin Giseru* [Attached Each Other like the Silver Connecting Tube of the Smoking Pipe], 1992 Santō Kyōden Zenshū [Complete Work of S.K.], Penkan Sha
- SASAKI Maki 1998 *Pinku no Zō wo mitaketaka* [Do you know where the Pink Elephant is?], Ehonkan
- SATŌ Aki 1991: *Barutaza-ru no Henreki* [Et in Arcadia Ego, peregrination of Balihazaar], Shinchōsha
- SHERER, René 1993 *Zeus hospitalier*, Paris, Amand Colin
- STAFFORD, Barbara Maria 1997: *Body Criticism, Imaging the Unseen in Enlightenment Art and Medicine*, The MIT Press
- TADA Tomio 1993 *Men'eki no imiron* [Semiotics of the Immune System], Seidosha
- TANIGAWA Atsushi 1996 *Bungaku no Hifu* [Skin of the Literature: homo aesthet. cs], Hakususha
- TSURUMI Shunsuke 1996 "Jibun wo sagasu hon" [Books to find out yourself], *Tonchi*, Chikuma Shobō, May, pp.39-41
- UMEHARA Takeshi (ed.) 1992-a: *Nōshi to Zōki Ishoku* [The "Brain Death" and the Organ Transplant], Asahi Shinbunsha
- UMEHARA Takeshi (ed.) 1992-b: *Nōshi ha Shi de ha nai* [The Brain Death is not the Death], Shibunkaku
- YŌRŌ Takashi 1989: *Yūnō-ron* [Only Brain], Seidosha

アートと交差するハイパーリンク批評誌

Diatxt.06

発行日 2002年3月19日

編集長 吉岡 洋

発行 京都芸術センター
〒604-8156 京都市中京区室町通蛸薬師下る 山伏山町546-2
TEL. 075-213-1000 / FAX. 075-213-1004

発売 株式会社 星雲社
〒112-0012 東京都文京区大塚3-21-10
TEL. 03-3947-1021 / FAX. 03-3947-1617

デザイン 木村三晴

印刷・製本 日本写真印刷株式会社

定価 (本体1,000円＋税)

本誌掲載の写真・記事等の無断複写・転載を禁ずる

2002 Printed in Japan

ISBN4-434-01797-7 C0370

©2002 Kyoto Art Center